

第 23 回 歴史リレー講座「明神山 360 度—大和の文学を語る—」 上野誠氏 (H28.8.21)

現代のみならず古代においても、奈良生まれの人物が実は世界とつながっている。なんと素晴らしいことでしょう。例えば、大化の改新の理由は中国が統一国家になったため日本も早急に中央集権化を進める必要があったからですが、これには飛鳥出身の南淵請安みなぶちのしょうあんという人が関わっています。彼が派遣先の中国から帰朝した際、いずれ日本に危機が訪れると予想したことが大改革を推し進めるもとになりました。

また、桜井から出た阿倍仲麻呂は平城京から唐へ渡り、玄宗皇帝のもとで国務大臣を務めました。日本へ帰る船がベトナムに流されたため長安まで戻り、そののち唐が安祿山の乱あんろくざんによって凋落するさままで見極めた人でもあります。仲麻呂と同時代を生きた詩人の李白、王威（途中で失脚）、杜甫（宮廷にすら入れず）らと比較しても、彼の活躍ぶりは群を抜いていました。

奈良の仏教は仏舍利（仏の骨）信仰です。鑑真和上が日本に持ち込んだこの信仰を基に社会事業に邁進した僧にんしやうが忍性です。また、東大寺大仏開眼の導師を務めたのはインド僧である菩提僊那ぼだいせんなでした。奈良の文化は当時から極めて国際的だったといえます。今の平群町の地で権力を振るった豪族平群氏を紹介しましょう。なかでも平群広成へぐりのひろなりは唐で玄宗皇帝に生涯 2 度も謁見し、外交官特権を得ました。彼も仲麻呂と同じように日本への帰途の際、暴風に見舞われベトナムに漂着。さらに、風土病のため生き残ったのは 115 名のうち自身を含む 4 人のみ。玄宗皇帝の命により 4 人が長安まで戻ったところで仲麻呂の登場です。今度こそ彼らを無事日本に帰したい。そのためには日本との交易を望む国、渤海ほっかい（シベリアの南）に働きかければうまくいく。そう踏んだ仲麻呂は広成らと渤海で国王大欽茂だいしんもに謁見、彼らを帰国へと導きました。玄宗皇帝、ベトナム国王、渤海国王、聖武天皇など、実に広成も仲麻呂も当時勢いのあった国々の王に会っています。これはマルコポーロをもしのぐ偉業といえるでしょう。

さて、平城京などの都が必ず国の内陸部にあるのは何故でしょうか？都造りのお手本である中国の長安、洛陽、百済の扶餘、新羅の慶州などがすべて内陸部に造られていたからです。中国の歴史書『洛陽伽藍記』を繙くと、都の周りには山が巡らされ、南は開けて遠くに三山が必要だと書かれています。もちろん外国勢力の侵入を防ぐためです。藤原京（慶州が手本）も平城京（長安が手本）も見事にこの「規定」にあてはまります。加えて、中国の都には必ず南に南山なんざんがあります。一方、奈良全体は国中くんなか（奈良盆地）、山中さんちゆう（都祁村）、奥（宇陀）、そして南山（吉野）から構成されます。この南山は『古事記』序文に「仙人が修行する場」と記されています。山々に囲まれた地が都として最適である。これが古代の都に対する考え方でした。

ここで明神山に登ってみましょう。頂上から 360 度を見渡せば、それはまさに「大和の歴史絵巻」。「大和は国のまほろばたたなづく青垣山ごもれる大和し美し」の青垣は緑が垣根のように見えるという意味です。奈良盆地を望むと大和三山、法隆寺、東大寺、興福寺…。法隆寺は日本で最初に指定された世界遺産です。日本の美術が法隆寺の仏像を中心に発展を遂げたからだけでなく、寺の多くの宝物が明治天皇に献納されたことなどがその理由といわれます。また、人間の内側を描き出した興福寺の仏像は世界的に見ても最高傑作です。西に目をやると畿内への西の入り口、明石まで望めます。手前の四天王寺は法隆寺とともに聖徳太子信仰の起源ですが、四天王寺のある夕陽丘という地名は、「日想観」という平安時代の仏法修行に由来します。遣新羅使はこの地（難波津）を経て平城京へ戻ってきました。すなわち鑑真和上がたどった道と同じです。

奈良の歴史を理解するには相当のレベルが必要です。そのためには読書や講演会で知識を吸収するしかありません。知識を積み重ねていけば、きっと多くの宝物を得られるでしょう。そして、当たり前に見ているローカルなものや伝統的な文化が世界とつながっているんだと実感していただけるはずです。